

## 史的唯物論の適合性(下)

—複合的な歴史觀と史的唯物論—

小林 彌 六

本稿の(中)では社会を構成する種々の要因としてどのようなものがあるか、それぞれの要因はいかなる性格のものであるか、それらがおのおの「自律性」(autonomy)を有すると解されることなどについて述べた。歴史的に見られた数多の社会の構造やその変動、ある社会形態から他の社会形態への移行・推転などの理路を明らかにするために、進んでこれらの要因とのかかわりにおいて社会がどのように構成されているかを解明しなければならない。かりに社会が経済・親族・社会・政治・宗教・文化等の要因から成り立っているにしても、それらの機械的総和において構成されるにとどまるわけではない。エンゲルスが指摘するとおりそれらの要因のあいだには「相互作用」の網の目が張りめぐらされており、また変動・変化するものであるといえる。

これら諸要因の相互関係のあり方について考察する前に、いくつかの事項について述べておこう。まずこれらの要因が存在するのは何故かを考えておこう。ラドクリフ・ブラウンやマリノウスキーらの「機能主義」(functionalism)<sup>(1)</sup>の見方からすれば、それらの諸要因・システムが存在するのは、社会の存在にとって必要な機能をはたすからだと言われるのであろう。そういってよい面も多いのは事実である。しかし一口に社会といってもじつに多種多様である。

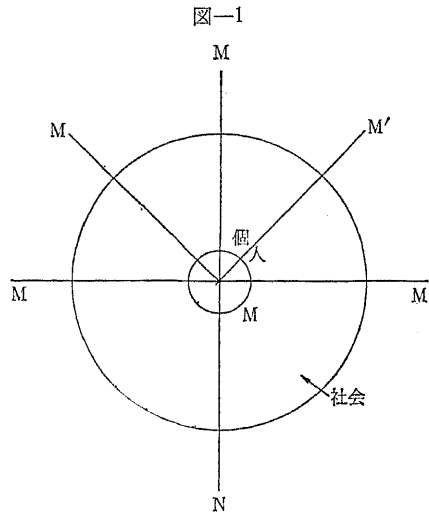
人々が生きていくうえでどうしても形成しなければならぬ社会もあれば、その必要をはるかに超えてさまざまな要素を含むようになっていく社会もある。また虫垂のようにさしたる機能をはたしていないのに存在する要因もある。問題はかならずしも単純ではない。ところでこれらの経済・親族・宗教等の要因・システムが社会にとって必要な機能をはたすということをもう少しつめて見ればどういふことだろうか。

そもそも社会とは何であらうか。上述のとおり実際には千差万別といつてよいほど多彩なまた大小さまざまな社会があり、なかなか一概に定義しにくい面があらう。その点を念頭に置いたうえで述べるなら次のように考えられる。一人一人の人間は生きていくうえでさまざまな事情から他の人間との種々の関係を結ばざるをえない。このことにもついでに社会関係が成立する。ついでながらこの事情には、生殖・育児もあれば外敵から自らを防衛する必要もあるなど多様な事実があらう。ところで社会関係が成り立つためには、「万人の万人に対する戦い」(ホッブス)の状態へのめり込みを避けるために、さまざまな規範や倫理が設けられねばならない。そしてそのような観念をいわば貨幣として、人と人との出会いが成り立ち社会的な関係・交流が平和裡に可能になる。またそのような関係が取り結ばれることと重なり合うかたちで、多くのばあいにゲメインシャフトリッヒな人間の結合関係ないしは人間集団が発生し存続する。もちろんゲゼルシャフトリッヒな人的関係・社会集団も成立する(テンニェス)。それだけではな。一度これらの集団が成立し存続するようになると、それは人々によって個人を包み込み拘束する組織・集団として表象されるようになり、またそのようなものとして存続し運動するものともなる。人々はつねに社会あるいは団体を意識しながら判断を下し行爲することになる。こうして社会・集団・共同体などはいわば「物象化」(Versachlichung)するのである。<sup>(2)</sup> 社会は個人とその行爲よりなるが、また個人とその行爲は社会によって規定されてもいる。

ちなみに社会を理解するのに個人からアプローチするか、社会の機能・構造からアプローチするかの二つの接近方法がある。それらはこれまで永い間社会理論の二つの系譜としてそれぞれ彫琢され今日に到っている。社会学にとどまらず経済学・人類学などを含むやや広い視角から見ると、一方にデュルケーム、ジンメル、マルクス、レヴィ・ストロース、パーソンズなどの機能主義あるいは構造主義のアプローチがある。社会の全体の方から出発して個人とその行為も把握しようとする接近方法である。これに対して個人とその行為から出発して社会の認識に到達することを試みるのは、M・ウェーバー、パレット、ワルラスなどの新古典派経済学、パーソンズなどの接近方法であると分類できようか。<sup>(5)</sup>これらのアプローチのもつ意義をどう評価すべきであろうか。その問題点はどこに求められるであろうか。社会と個人との関係は、社会のみがあつて個人は自由度を持たないその一部分にすぎないとはいきれない。かなりの程度の自律性を有する有機体として個人があり、それらの活動によって組み立てられるかたちで社会が存在する。といつても社会はその構成員の単純合計ではありえない。はるかにそれを超える存在であり、これもかなりの程度「自律性」をもち存続し変動するものであるといえよう。個人と社会は自律的でありつつも互いに切り離すことができない緊密な相互前提関係のうちにある。また個人と社会は互いに働きかけ合い規定し合う「相互作用」の関係にもあるといえる。したがって存在するのは個人だけであるとか、社会だけであるとか断定することはできない。ついであるが少し付言しておくことにしよう。厳密にいえば存在するのは個人と社会との二つにとどまらない。通常そうであるとおり社会がかなりの数の構成員を持つ規模であるとしよう。社会とその構成員との二つの単位の間には、サブシステムともいえる小・中人数の人間と彼等が織りなす相互関係が沢山ある。それらのサブシステムは重層的に存在しましたそれらの間に複雑な相互関係が成り立っている。さらにそれらのサブシステムと社会との間に相互規定関係

があるといえる。こう考えてくると社会といい人間集団といわれるものの性格は、大変に複雑で「複合的」かつ「重層的」であることがわかる。個人と社会というアクシス（座標軸）は叙上のような性質をもつ。（マルクスは早くからこの側面を重視していた。「人間は一つの類的存在である」〔『経済学・哲学草稿』と把え、人間のあいだの「交通」(Verkehr)〔ドイツ・イデオロギー』を重視した。これを黒沢一清氏にならってM—M系と表わすことも可能であろう。ついでながら人間生活・社会のあり方を規定する座標軸・システムとしてはこのほかにも注目すべきものがある。もともと人間・社会の「環境」(environment)ともいうべき重要な要素が二つある。一つは人間生活・社会がその上にあるいはその中に成り立つ環境ともいうべき自然である。人間と自然との関係を示すアクシスをM—N系と名づけることができよう。<sup>4)</sup>人間が生きるためには大地・空気・太陽光線・海洋・河川や植物・動物などの生態系や各種資源などを必要とする。人間が生きるということは人間と自然との間に諸種の物質代謝活動が営まれることを意味する。この系については今日では資源問題・公害問題が漸くクローズアップされるに至った状況もあって注目されることが多い。このほかにじつは忘れられない別のアクシスがある。社会・人間集団とその外部にある他の社会・集団との間にはとかく微妙な関係がある。テリトリーの占有や財産さらには人間それ自体の占有（奴隸化）などをめぐり、社会・集団間できに平和的に（例えば協約や通商など）ときに暴力的に（侵攻・戦争など）接触が起こる。人類的歴史的な歩みはこれら二種の出来事によって複雑に織り上げられていることも否定できない。これをM—M系と名づけることにしよう。

以上から知られるとおり人間集団・社会は図のような基本構造をもつといえる。図1でM—M軸の下部は自然を示す。個人、人間もちろん肉体（内的自然）をもつ点において自然的な側面をもつ。他面で頭脳の特異な発達にもと



づく意識・知性などの人間的な側面をもつ。

M—M系にかんし、社会集団のメンバーである個人には、それぞ  
れ性別・老若・パーソナリティーなどの面で複雑な違いがある。人  
数の多寡による違いもある。これだけでも個々の社会集団には微妙  
な差異が生じよう。M—N系にかんし、自然環境・自然条件(N)  
は地域によって地形・気温・降水量・緯度・高度差などまさに千差  
万別である。ヒトが狩猟・採集(hunting and gathering)の生活を  
している場合にはそれぞれのテリトリーの特徴に強く規定され、そ  
れへの適合が強く要求される。そのため住む地域によってヒトの生  
活様式は多彩な違い例えば—エスキモーとブッシュマン—を示して

いる。人種の違いも根元的にはN条件の違いにもとめられるほどなのであるから、この事実が人間集団・社会のあり  
方にたいして有する規定力・影響は無視しえないものがある。未開と文明、あるいは工業化とモノカルチャーなど、  
地球上の諸地域での歴史の歩みのうえに見られる違いもこれにつながる点が少くないであろう。

歴史学の成果からすれば当然のことといえるが、M—M系、集団間関係、例えば部族間、民族間、国家間の関係が  
社会のあり方・歩みにたいして与えた影響も非常に大きい。ゲルマンの民族移動がローマ帝国を崩壊させヨーロッパ  
の中世を生みだしたこと、あるいは異民族の中東やインドへの侵攻がそれらの国の歩みに与えた影響、生み出した結  
果を想起すればこれは容易に得心のいく事柄であろう。

これらのM—Nアクセス、M—M系への着目は個々の事実を追うことを大切な課題とする歴史学では自覚的にであれ結果的にであれ見られる。人類学や民俗学・考古学また社会学はかなり意識的に人間と社会のこれらの側面をフォローしようとする。マルクスも「人間自身の肉体的性状にも、また人間の眼のまえにみいだされる自然条件すなわち地質学的、地理学的、風土的その他の諸関係」にも、「暴力、戦争、掠奪、強盗殺人などが歴史の推進力とされてきた」ことにも、また「征服する蛮族のばあいには、すでにふれておいたように、戦争そのものがまだ一つの正常な交通形態である」(『ドイツ・イデオロギー』<sup>(5)</sup>) ことにも気付いている。そして「はるびつつあるローマ帝国の最後の数世紀と蛮族自身による征服とは大量の生産力を破壊した」(『ド・イデオ』)とも記している。M—N系、M—M系の存在をかなりの程度意識しているといえる。しかし歴史観を正面から問題にしようとする時には、ヘーゲル歴史哲学等の流れを汲むヨーロッパ中心史観に傾斜しがちなこともあってこれらのアクセスに十分な配慮を見せない傾向がある。もう少し立ち入っていえば、マルクスはM—N系のなかの経済活動をみつめてその媒介項ともいうべきテクノロジーの時系列的発展こそが、社会構造の変動の起動力であると判断した。そのさい自然(N)の地域による隔差がもたらす歴史的な分化傾向はややもすれば軽視されがちであった。いきおい生産力・テクノロジーの発展が普遍的でありかつ自律的・必然的であると解される傾向が強かった。その点ではM—Mアクセスの地域差からくる経済過程への規制力、例えばアジア的生产様式に見られるような停滞性についても、応分の配慮がなされないきらいがあったといって過言でないであろう。

社会・人間集団の構造と変動を根元的に規定する「座標軸」としてM—M系、M—N系、M—M系の三つが注目される。なおこれらの系のいずれにも人間(ヒト)の肉体的な存在・欲望や意識・観念・心理が絡まっている。個人の

行為や意識にはヒトとしての生物学的構造・機能・生存・肉体と脳髓や神経系統のあり方が切り離しがたく結びついている。これをM系としよう。図1で中央に記した個人にまつわるのがこの系である。すすんでいえば社会・人間集団の構造と変動・変化を根元的に規定する系としてこのM系が加えられるべきであるといえる。マルクスの歴史観・世界観と叙上のヴィジョンとを対比させてみよう。それが照準をしばっているのは、前にも述べたとおりM—N系のうちの一部分領域とM系の一部分領域である。M（ヒト）とN（自然）との関わりとしては地域の自然の千差万別ともいうべき差異が人間生活・社会のあり方にたいし及ぼす差異がある。ヒトが自然のなかにあって自然に接し自然と関わりをもちながらどのように感じ表象し、観念をもつかも、宗教・イデオロギーなどにたいし忘却されてはならない影響がある。そのほかヒトは生きるうえで通常経済活動と考えられる範囲をはるかに超えて、太陽光線、大気、水、土壌や植物、動物などの自然環境に依存し、自然との交流・物質代謝が必要である。労働・テクノロジー・各種労働手段を媒介にして営まれる人間と自然との物質代謝が中心である経済活動だけがM—N系のすべてを占めるわけではない。一部分領域と記したのはその理由による。M系についてもマルクス・エンゲルスは「人間的個体の生存」に着目する。つまり生物としてのヒトの肉体の維持・生存をひたすら凝視する。つまりいわゆる「下部構造」(Fracture)に注目しこれによって社会の根元的な構造が決定されると考える。

ちなみに「世界史とは、精神が本来もっているものの知識と精神自身で獲得して行く課題の叙述である」と考えたヘーゲルは、M系の精神・知性の部分をひたすら凝視したといえよう。そしてその「無限の衝動」・運動によって社会が世界史の行程が刻まれるとする解釈を試みた。現実の世界史を根元的に規定づける上述のような四つの系（もちろんこれを絶対のものではなく一種の仮説 (Hypothesis) であるにすぎないが）があるのにたいして、ヘーゲルはこれ

をM系のなかの精神の部分の自己展開に還元できると考えた。その視角は次の文章に端的に表明されている。「世界史は精神の神的、絶対的な過程をその最高の形態において叙述するものであり、精神がその真理、その自覚に到達するに要する段階の叙述だからである。そしてこの段階のそれぞれの形態が、すなわち世界的な民族精神であり、その人倫的生活、その憲法、その芸術、宗教、哲学といった特殊な形態である。つまり、これらの段階を形成し、実現しようというのが、世界精神の無限の衝動であり、抑えきれない渴望である。なぜなら、このような自己分化とその実現こそ、世界精神の概念であり、本質なのだからである。——世界史はただ、この世界精神が漸次に真理の意識と意欲とに到達して行く行程を示すものにはかならない。まず精神の夜明けが訪れる。次に、精神は次第に要所を見分けて得るようになり、最後には、完全な意識に達する」。

ヘーゲルは当時までに知られた世界史上の知見を、観念論的弁証法の視角から一元的・還元論的な手法で解釈しようと試みてみた。複雑極まりない世界史の現実を一元論的に、かつまた観念論的に説明しようとする試みはどうしても現実離れたこじつけになり易い。今日われわれが彼の説く所を読むと観念のつぎはぎを、世界史の神話を読む思いがするのを否定できない。このことは上述の事情に由来するのであろう。そのことはマルクスとエンゲルスによって犀利に反駁されたとおりである。ではマルクスとエンゲルスにおいてはどうか。これらの座標軸が知られていなかっただといえばおそらく云い過ぎになるであろう。彼らが強調したかったのは、それらの座標軸のなかでM—N系の一部、M系の一部が下部構造をなし他の部分はその土台のうえに築かれる上部構造にあたるということであったかもしれない。その意味でこれらの座標軸自体が重層的な規定構造をもっているということを示したかったというべきかもしれない。ただそう考えるにしても生産力の発展の程度・生産様式が第一義的に構造決定的であるという



命題がマルクスとエンゲルスによって首尾よく説かれたとはいえない面がまだ残りそうに思われる。ある社会構成体から他の社会構成体への移行についてはさらにそういえる。これらの詳細については後論にゆずるとしてM—N系のなかの生産力・テクノロジーに極端にアクセントを付していることが他の座標軸の存在とそれらのもつ意義についての評価を薄めてしまっているといつてよからう。

M・ウェーバーの多方面にわたる研究は、マルクスやエンゲルスの詳らかにしなかった他の座標軸の析出をめざす学的営為であったといえる面がある。また社会学・人類学・心理学などの数多の研究にもそのような意義をもつものが多い。もちろんそれらの歴大な学問的営為がマルクスやエンゲルスが提起した世界史のヴィジョンを止揚しそれにかわる優れたヴィジョンをすでに明晰に紡ぎ出しえているかといえ、にわかには論定しえないところなのであるが。レヴィ・ストロースをはじめとする構造主義の人類学にしても、タルコット・パーソンズに象徴される現代の社会学にしても、おそらくは史的唯物論を明確に止揚する水準と内容をまだ達成していないといふべきであろう。この点についてはのちに立ち入った考察を加えることにしよう。ただここで一言しておきたいことがある。これらのマルクス主義あるいはマルクス経済学とはジャンルを異にするフィールドでの研究は、マルクス学が追求するテーマの研究にとつてはなんら意味のない作業であると全面的に拒否することで事は済むだろうか。それらはすべてマルクス学への敵意に支えられたその攻撃をターゲットとするブルジョア的でイデオロギッシュな学問であるといえるだろうか。そのような側面がまったくないとはいえないかもしれない。しかし、全面的にそうであるとしてそれこそイデオロギッシュに拒絶するのはおそらく見当違いであろうし、ひいてはこれらのフィールドの豊かな成果を吸収し活かす可能性を自ら封じてしまうことになる。もちろんマルクス学の今後の豊饒化・深化・発展の芽を自らの手でつんでしまう

ことになりかねない。すべてをイデオロギーの色眼鏡で見、レッテル張りで事が済むと考えるのは不生産的である。

またマルクスやエンゲルスらも決して肯じなかったと思われる知的怠慢に陥ることになるおそれがないだろうか。学問・科学を素朴な反映論で割り切る姿勢は今ももしあるとすれば学問の進歩の妨げになるほかないであろう。さまざまなジャンルの研究・蓄積を柔軟に受容すべく前向きに取り組むことが当然とはいえもとめられているのではなからうか。その努力によっておそらくは社会・歴史の認識ももちろん経済の認識も一段と正確になってくるのであろう。

社会・人間集団とはどのようなものか、どのような構造をもつかをさしあたり叙上のように理解するとする。そこで問題は本稿の(中)でそれらの「相対的自律性」(relative autonomy)を確認した経済・政治・親族等の要因・システムが社会にたいしてどのような位相を占めるかを究めることである。しばしば述べたとおりそれらが社会・社会構成体の構成因子であるとして、これまで論じたM系、M—N系、M—M系、M—M'系などの諸々のシステムとこれらの因子とはどのような関係にあるのだろうか。端的にいつてこれらのすべてが同一次元にあって社会の構造を規制しているわけではない。M系、M—N系などのさまざまな要因、システムは深層にあって社会のあり方を規制する力として作用している。それらの系に關係をもちながらより一層具体化した要因・系・システムとして、経済・親族・支配(政治)・文化等が成立し存在するし、またそれらが変動・変化する。例えば経済システムは人間が肉体を維持し生活するために必要な財貨やサービスを確保するために営まれる活動であるとする。採集経済にせよ農業あるいは工業にせよ、それらは人間の自然との交流を必要とする。また経済活動は殆んどはあい人々の協力があってはじめて営まれる。このようなことから判かるように、それはM系、M—N系、M—M系ひいては輸出入などに見られるようにM—M'系とも關係する。同様の事情は他の要因についても指摘できる。

ところでこれら二層の社会構造はわれわれが社会の仕組みを知ろうとする角度によって生じるもののもうでもある。このばあいは社会が二重の構造において成り立っているのでなく、われわれが社会を認識しようとするさいに二層の論理構成がなされるということである。このようなケースがしばしばあることは注目されてよいであろう。これにたいして認識の対象である社会が二重の構造を持っているために、それに応じて論理構成も二層のかたちをとるといふことがある。現在、考究の対象である社会にあってはどうかであろうか。これらの二層の審級 (Instance) は見方の違い社会にたいする切り込みの角度の違いから生じているのだろうか。それとも社会そのものの仕組み・構造 (structure) にもともこのような重層性があってこれら二層の構造が生じるのだろうか。これは単純なことで意外に難しい問題ではないかと思われる。対象が重層的な構造を持っているからそれを認識しようとする論理の構成が重層的になるのだろうか。それとも人間の脳髓の持つ理解能力に適合するかたちで対象の性格を認識しようとする時に必要となる思考上の手続きによりそうなるのであろうか。このことは今日でもなおじっくりと問いつめられねばならない論点として残されているのではないかと感じられる。ちなみに商品からはじまる『資本論』ないしは経済学原理論の体系の内容にあたる論理はそのどちらなのだろうか。よく知られているようにマルクスは「経済学の方法」を、具体的・現実的なものから思考による抽象によって単純な概念に到達し、そこから「もっとも単純なものから複雑なものへと向上していく」「後方への旅」が行われるというように説明している。「経済学の方法」が現実を理解するための手続きであることは明らかである。とはいってもこのこと自体、今日でも十分に顧慮・省察されねばならぬ問題を含むのであるが、<sup>(8)</sup>上記のとおり「経済学の方法」は認識のための方式であるが、他方ではまた資本論や原理論にそくして推定されるとおり、そこには現象と本質、形態と実体、量と質などの諸々の問題が絡み合っている。

対象のもつ構造・性格が論理的認識にあたって当然ながら考慮されねばならない。同じことではあるが、対象がどのような仕組みをもち構造をもつかと判断することが理論の構成に関係するといえよう。

当面の課題である社会の仕組みあるいは構造について考えよう。経済、親族、社会、政治、文化、宗教などにより構成される現実の社会の次元・審級 (instance) にたいしてその内部あるいは深層に M 系、M—M 系、M—N 系、M—M' 系などの種々のシステムが横たわっているといえるのではないか。これらのさまざまなシステムは経済、社会、宗教等にくらべるとより抽象的なものとなっている。たとえば M—M 系には経済や社会も文化その他の諸システムも関わっている。ヒトが生きたるためには多種多様な関係をヒト相互の間でとり結ばねばならない。それらの関係にはおのおの特徴があり、同類型の関係がたがいに関し組織化されてそれぞれのシステムを生みだす。つまりより根源的な M—M 系が具体化・展開して経済・社会・文化等のシステムになると考えられる。根元的には人間が生きていくうえでこれらの活動は融合交錯して営まれる。それが社会的には、互いに関連をもちながらも相対的に自律的なものとして分化するといえる。これらの二つの次元・審級は抽象と具体の関係ともいえるが、社会の根元・核 (core) 構造と具体的な構造との関係ということもできる。

そしてこの核にあたる部分の存在に注目することが、社会の仕組み・性格やその変動・変化を理解しようとする時に大切なように思われる。行論のうちこの点に触れることにしよう。なおこの核にあたる次元が存在することの理由にかんし、もう少し記しておくことにしよう。端的にいえばこれは動物が生きたる時にその生活を規定する主要な軸にあたるものと、おおむね対応する。動物は自然のなかにあって、遺伝子からくる情報に従って行動する部分が多いが、他の個体との関係や他種の動物・生物との関係も重要な意味をもつ。M 系もあれば M—N 系、M—M 系、M—M'

系も重要な意味をも<sup>(9)</sup>。

もちろんヒトのばあいには他の多数の動物と非常に違う点がある。二本足で直立歩行するようになり前足を手として使えるのもヒトの特徴と考えられてよい。しかし何よりも重要な特徴は高度に発達した脳髓をもつに至っているということ、さらに進んでいえば大脳新皮質の顕著な発達が見られることである。そのためヒトは意識をもち複雑な事柄にかんする判断力をもち、優れた思考力をもつに至っている。ヘーゲルの着目した「精神」(Geist)や自由も、マルクスが着目した人間労働の特徴である「合目的な意志」(der zweckmäßige Wille) (『資本論』<sup>(10)</sup>)もこの意識や思考力に関係している。マルクスはヘーゲルの描出した精神の営為を人間と「自然との物質代謝」(Stoffwechsel mit der Natur) 活動である経済、とくにその中核である労働過程に見出したともいえよう。ただし人間の意識は経済活動をめぐって働きかつ生じるものに限られるわけではない。また人間の行為は意識性にもとづいて行われるものにとどまるものでもないのであるが。

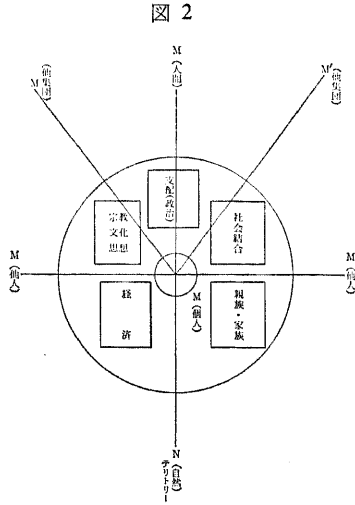
- (1) Mark Abrahamson, Functionalism
- (2) 真木悠介『現代社会の存立構造』、広松渉『物象化論の構図』など参照。
- (3) 佐藤 勉『社会的機能主義の研究』参照。
- (4) 黒沢一清『産業と環境』にこのようなアプローチで示唆に富む論述がある。M—N系についてはエコロジ、資源問題の角度からもローズアップされている。例えば、いいだも『エコロジとマルクス主義』
- (5) K・マルクス『ドイツ・イデオロギー』古在訳、岩波書店、二七頁。このようなヴィジョンは例えば庄司興吉『現代化と現代社会の理論』第三部に見られる。M—N系、M—M系にたいする注目はそれが十分な広がりをもって捉えられていたかは別として、早くからマルクス主義・マルクス学の視座のなかに含まれていたといえる。
- (6) ヘーゲル『歴史哲学』(上) 武市訳、七七頁。

- (7) 同右、(上) 一三五頁。
- (8) 拙稿「論理的純粹化・抽象と經濟原論」『日高普先生遺曆記念論文集』(上)、所収を参照されたい。
- (9) 宮地伝三郎『動物社会』、H・カラン『動物の行動と人間の社会』など参照。
- (10) K・マルクス『資本論』①大月書店、二三四頁、Das Kapital, S. 186, Dietz Verlag, 1953.

### 社会を構成する諸システム

人間は靈長類中の特異な動物(特異なM系)であることによってその意識や行為、その形造る社会は他の多数の動物とのそれとは際立って異なる。動物の一種であることからくる共通性もあるのだが、M—N系その他の系においてもすでにその相違は内包されている。これらを核にして発現・開花し分化・具体化する人間の社会を構成するサブシステムに、經濟、親族・家族、宗教、政治、文化などがある。これを示せば図2のようになろう。

サブシステムをもっと細かく区分することも可能だろうし、これらの要因・システムの相互関係も社会(形態)の違いに応じてさまざまであろう。未開社会の多くは現代社会や中世社会など他の社会にくらべるとがいして規模も小さい。また經濟、親族、社会結合等のシステムも互いに重なり合う部分が多い。別の表現を使えばそれらのシステムの分化が低位にとどまっていることが多い。氏族・家族・部族などに見られるように未開社会では、親族・家族などの血縁集団と社会的結合とが重なり合っていることが多い。支配(政治)の要素ものちの大半の文明社会のばあいに見られるように、固有のシステムとして社会的結合から画然と析出・分化するまでに至っていないことが多い。それに応じて社会構成員のあいだの階層関係が拡大・固定化・世襲化されることも少い。社会の階層化はかりに発生するにしてもがいして微弱にとどまることが多い。別の角度からアプローチするとつぎのように解されよう。一口に未開



社会といっても二、三百万年という文明時代にくらべると気が遠くなるほど永い年月にわたり発生・存続・消滅を繰り返したものと推定されている。数千年前に人類がメソポタミアを先導にかねがね文明時代・歴史時代に入ったのちも、ごく近年までオーストラリア、アメリカ、アフリカなど地球上の非常に広い地域にわたって依然未開社会は存続しつづけた。十六・七世紀以降のヨーロッパをセンターにする資本主義の時代に入ってから地球上の広範な地域で未開社会の分解や破壊が急速に進んだことは事実である。それでもなお現在地球上のさまざまな地域に未開社会が存続していることは広く知られている。

このような未開社会ではさまざまな社会システムはがいて重なり合い分化の度合いが低い。氏族にみられるような血縁集団がそれ自体として社会をなし、このような血縁（親族）集団が経済も宗教も文化も司るといふ状態が通例である。この点について人類学の細密な研究を行い、造詣が深いフランスのマルクシスト、M・ゴドリエは次のように説いている。少し長くなるが引いて置こう。

「われわれの資本主義社会における生産過程を考察しよう。資本家と労働者との生産諸関係——この諸関係のもとでは労働者は生産手段を所有する資本家のために労働することを余儀なくされる——は、彼らが相互にもつことのできる宗教的、政治的、さらには家族的諸連関から十分に独立しているようにみえる。未開社会においては事態はもは

や同じではない。経済学者はこれらの社会の生産諸力（狩猟、漁業、農業、牧畜）をきわめて容易に弁別するが、生産諸関係は見分けそこなう。少なくとも生産諸関係は、一般に経済学者が親族の機能に目を向けるときにのみ、彼の前に姿を現わす。諸個人や諸集団の親族諸関係は、土地や生産物の利益権、他人のために働いたり、与えたりする義務、等々の源泉であるようにみえる。それらはまた、一定の諸個人が集団のなかで行なう政治的・宗教的機能の源泉であるようにみえる。このような社会では、親族関係が社会生活を支配する。それでは、どのようにして経済の最終審級における決定因的役割を理解するのか。

実はもっと詳細にこの親族関係を分析してみる必要がある。なぜなら、もし親族関係が生産における諸個人の位置、彼らの土地と生産物にたいする権利、彼らの労働し提供する義務、等々を決定するとすれば、親族関係は、政治的、宗教的、等々の諸関係として機能するのと同じく、生産諸関係としても機能する。したがって、親族は、下部構造であると同時に上部構造でもある。それゆえに、生産諸力——生産諸関係の対応関係は、同時に経済と親族との対応関係でもある<sup>(1)</sup>。

これにくらべると、いわゆる文明社会ではどうだろうか。親族は中国のように後世まで人々の生活に深い関わりをもつこともある。ただどこでもそうだというわけではない。インドではむしろカストが人々の生活を規定し、カスト間にヒエラルキーがありカスト間には反撥と競争がある。人々にとって親族よりは属するカストのほうがずっと大きな意味をもつ<sup>(2)</sup>。とはいえ一般的にいえば中国をも含め文明社会では、地縁につながる人間集団・共同体がはたす役割が未開社会にくらべ大きくなっている。経済や社会的統合・文化・宗教などもこの地縁的集団によって担われる度合が高まってくる。灌漑・治水などの作業が人々の協同を必要とすることがその一つの象徴であるといつてよい。つい



でながら未開社会から文明社会への移行が通常、農業の開始と発展いわゆる農業革命に結びついていることはここで指摘されてよいことであろう。未開から文明への移行にともしない親族と異なる社会的結合の要因が重要な意味をもつてくるし、経済生活も狩猟・採集 (hunting and gathering)<sup>(3)</sup> から農業や牧畜に主体が転じてくる。さらに多くのばあいに文明社会では支配の要因がせり出してくる。王や貴族などの支配体制が定着し社会は階級社会に転じてくる。未開社会の民衆によってあるいは文明社会の民衆によって担われる文化もあるけれど、一般に文明・文化として想起されやすいものの多くはこの時代に出現してきた支配階級の営んだ文明・文化なのである。未開社会から文明社会への移行が大部分、水平的な社会から階級社会への移行と絡み合っていることは銘記されてよいであろう。いわゆる歴史時代の遺跡・遺物・文化の大部分は、被支配者の汗と血によって生み出された支配者の財産であり文化なのである。マルクスが指摘したように、文明といい文化といっても民衆のそれとはいえないものである所に歴史の重い事実が横たわっている。人類の永い歴史のなかでいつの頃からか人間は動物を手なづけ家畜として飼育することを習い覚え、農業革命の時期になって、人間は皮肉にも多数の他の人間を支配することを習得するに至ったといえる。宗教にしても未開社会の自然宗教からしだいに支配のための宗教に転換していく。

未開社会と文明社会とでは社会を構成するサブシステムに分化の差がみられる。システムの数も増える。支配被支配という系が新たな軸とに入ってくる。そしてそれぞれのシステムの担い手も支配者は統治し、被支配者は生産を行い、宗教・イデオロギーは神官や学者が担い手となるというように、「分業」が進む。未開社会といわゆる文明社会とのあいだでは、社会構造の点で非常に大きな変化が起こっているのが普通である。その違いを無視して社会構造を正確に理解することは難しいといわねばならない。

叙上の要因・システムの存在、未開社会と文明社会との違いを念頭におきながら、個々の社会・社会構成体がどのような仕組みで成り立っているかをすすんで考察しよう。といってもこれらの要因が存在すること、またそれらがそれぞれの機能をはたすことによって、個々人が生活し社会が存在することを支えていることはすでに明らかになっている。反復になるがこれらのシステムが存在し機能することによって個人も生活することができ、社会も維持される。このことは機能主義あるいは構造主義の社会観にとうじる面がある。またそのような側面において社会は多元的であり、また「重層的」(4) (マルチチュセルやバリエール) であると見なすこともゆるされよう。社会は複数のサブシステムの「接合」において成り立っている。その面では社会はなんらかの一つの要因だけから成立しているとはいえない。社会は一元的存在ではありえない。また一つの根元的な要因たとえば経済システムがあつて、他の要因はすべてそれから分化・派生したものであるともいえない。社会はもっと複雑ないわば複合的な構成体であるというのが正しいであろう。このような経済、親族、宗教などのシステムの「接合」として存在する次元とともに他面で社会はM系、M—N系、M—M系、N—M系から成り立つ次元をも含んでいる。このことはN・ルーマンが説くシステムのもつ「環境」(environment)の「複合性」(Komplexität)の「縮減」(Reduktion) (5)の働きと関わりがあるということができるともゆるされない。社会とはヒトとしてそれ自体、M系人間有機体としてのシステムをもつ人間がN(自然)やM(他集団)ひいては他人というM「環境」のなかで、どのようにその生命を維持し発露するかのシステムであるということもゆるされよう。以上のような事情を顧慮すれば社会はさらに多元的でありかつ「重層的」であるといえる。

ところで社会がそれぞれの機能をはたすシステムから成り立つということは、社会の存立にとってこれらのシステムのすべてがつねに不可欠の要因であることを意味しない。例えば国家(state)その他の支配のシステムは文明社会

にはかならずといつてよいほどに存在する。しかしそのすべての機構が社会の存立にとって不可欠の機能をはたすとは限らない。ところで社会的結合、経済、政治等の要因から社会が組み立てられているという事は、これらの要因のあいだに複雑な「相互作用」が働いていることでもある。エンゲルスはこの辺の事情について「それはこれらすべての要因の相互作用であり、そのなかで結局はすべての無数の偶然事(……)をつうじて、必然的なものとして経済的運動が貫徹するのです」と述べている。社会の仕組み・構造を理解するには、たしかにこのような事情の適切な把握が大切なのである。周知のとおりマルクスやエンゲルスには下部構造の経済システムが「法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデオロギーの諸形態」を規定するという考え方があつた。これを強くとれば経済決定論(economic determinism)あるいは「技術決定論」(technological determinism)とも解される歴史理論である。<sup>(6)</sup>さまざまな点への目配りはなされているにせよ、テクノロジーの発展によって社会形態の発展・進化が起ると解するのが史的唯物論であると考えられる。またそう解される史的唯物論がマルクス主義の核心であると理解する見方は現在の欧米でもまだかなり根強い潮流としてあることも否定できない。

こうしたテクノロジー決定論、「経済主義」の見地を単純にとりえないことについては、本稿でおりにふれ述べてきたとおりである。このような判断に立つとすれば今われわれが考察をすすめてつづつあるように、また後期のエンゲルスも考えたように要因間の「相互作用」において社会の構造が決定される仕組みを詳しく解明する努力が社会の正しい認識にあたつてもとめられる重要な課題になる。このばあい要因間の「相互作用」あるいは関係が重視されることになる限りでは、構造主義のアプローチともつうじる面が出てくるともいえよう。また当然にマルクスやエンゲルスによつて下部構造と規定された経済システム(生産様式・生産関係や生産力など)への還元主義によつて社会の構造

を理解しようとするのでなくなる。宗教や支配、法などの要因の自律性をも重視するしひいては親族の要因等をも軽視しないことになる。その点においては、M・ウェーバーやレヴィ・ストロースらの見地をもあながち排斥するものとはならないはずである。ともかく社会の現実の構造はさしあたり諸要因の機能とその相互関係によって決定される。その様相をすすんで考察するとしよう。

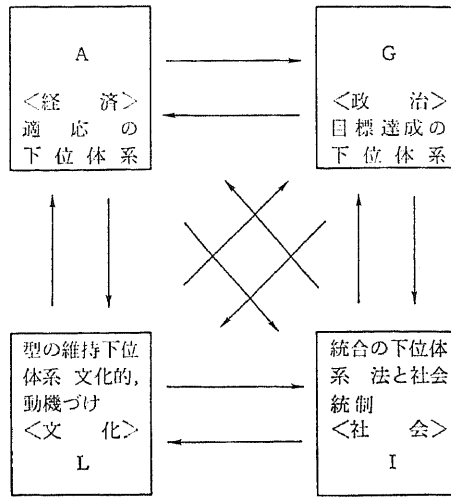
- (1) M・ゴドリユ『経済における合理性と非合理性』今村訳、一二六頁。ゴドリユについてはまた『人類学の地平と針路』山内訳。
- (2) F・L・K・シュエ『比較文明社会論』作田、浜口訳
- (3) Hunters, gatherers and first farmers beyond Europe ed. by J.V.S. Megaw, Jochim, Hunter-Gatherer Subsistence and Settlement
- (4) L・アルチュセール『甦えるマルクス』I II 河野・田村訳、L. Althusser, For Marx E・シリニール『史的唯物論研究』今村訳。
- (5) N・ルーマン『システム理論のパラダイム転換』土方訳。
- (6) McNulty, The Structure of Marx's World-view, W.H. Shaw, Marx's Theory of History, マルクスの歴史観について G.A. Cohen, Karl Marx's Theory of History

### 諸システムの相互関係

ところで社会の構造をこのような視角から定式化しようとした注目される業績にT・パソンズの理論がある。理論化され体系化されている点で機能主義・構造主義の典型ともみられるので、ここでその内容を検討しておくことにしよう。パソンズは社会体系をAGIL図式によって表示している。(A)は「適応的―道具的な体系操作」と命

名され、外的諸条件のもとで体系・システムが生き続けるための「適応」(adaptation)である。(G)とは「目標達成」(Goal gratification)で体系の存続・発展にとって有効に作用するような目標が設定されると、その目標が達成されることである。(I)とは「社会統合」(integration)で社会統制のメカニズムである。また(L)は「潜在的型の維持位相」(latent pattern maintenance)、体系の維持のための文化の型、

図 3



価値体系の社会成員への定着である。さらに(A)の下位体系として経済システム、(G)には政治、(I)の統合の下位体系として法と社会統制、(L)は文化とも称され、それぞれのシステムの間はインプット、アウトプットの関係でリンクされ、それに支えられてそれぞれのシステムの機能もはたされると解される。(I)エンゲルスのいう「相互作用」がパーソンズのばあい相互交換、インプット、アウトプット関係として明示的に定式化

されるに至っている。

AGIL図式が示そうとするのは何なのだろうか。社会体系一般の構造を示そうとしているのだろうか。それとも特定の社会形態の構造を示そうとしているのだろうか。パーソンズは社会について一般的に述べようとしているようでもある。しかし説いているところは現代社会を想定しての事柄であるようでもある。この点にどうも曖昧な感じが残る。サブシステムにしても、われわれの図式(図12)で示される親族や宗教などがパーソンズの図式には見当ら

ない。それらは（I）Ⅱ社会や（L）Ⅱ文化に属すると見るのであろうが、個々の人間がその中で実際に生きていく現実の社会の構造をつかむためにはIやLに括るのは抽象的に過ぎるきらいがある。（G）Ⅱ政治にしても「目標達成」という点にしばられるために、政治という要因・システムが支配（domination）とか権力に深く襲っている側面が見落されがちになっている。AGIL図式は抽象的に社会の構造を示す図式であると構想されることによって歴史的に実際に存在する社会（数多の多彩な社会）の構造を的確に引き出すかたちになっていない。社会はいかなるものとして存在しえまた存続が可能であるかを抽象的に考え、そのための要件（AGILとされる）は何か、その要件を満たす機能をはたすシステムは何かを割り出してきたのがAGIL図式なのであろう。社会の存続を抽象的に考えればI（統合）やL（型の維持）が問題になるのは自然である。しかし現実の社会生活で親族や宗教にもとめられる役割はたんに統合のためであったり、型の維持のためであったりするわけではない。結果としてそういう面をもつことは否定できないが、親族とはなによりも両性の結合と育児を核にする血縁の関係であるし、宗教は人々の心の救済のために強くもとられるイデオロギーであり組織である。政治にしても先に指摘したとおりたんなる「目標達成」のためのシステムと扱えたのでは根本的な問題が抜け落ちてしまう。

現実の社会の構造をとらえるためには、統合や型の維持などとならんで親族や宗教や政治などの種々のシステムの存在も明示的に取り扱う必要がある。

この点を別にするパーソンのAGIL図式は、それぞれのシステムがそれらの「相互交換」をとめないながらも、おのおの機能し社会の存続を支えている状態を巧みに説明できるかたちになっている。このような理論構成がなされたことの意義は十分に評価されてよいように思われる。それぞれの機能をはたすいくつかのシステムがなければ社会

は存在しない。またそれらの機能も孤立して営まれるわけではなく、互いに緊密な関係を保って営まれる。これらの事項は漠然と考えられているだけではきちんと理解されたことにならない。またその認識が普及する範囲も限られがちであろう。経済システムだけがあれば人々は生活ができ社会が存続するとはいえない。また経済システムから他の諸々のシステムへ一方的な規制・投入が行われるだけで他からの規制・インプットがないということはありえない。経済以外にも各種の相対的に自律的な要因・システムがあるのは至極当然である。またそれらの要因のあいだにエンゲルスがいう「相互作用」、パーソンズのいう相互交換があるのも当然である。

パーソンズの相互交換図式はこのような事情の解明にかなりの成功を収めている。とはいえそこには看過されてならない盲点がある。パーソンズの図式はある社会の存続の仕組みを機能的にいえば表面的に説明するためにはかなり有効である。だがそれで社会の構造を十分に認識できる仕組みになっていであろうか。疑問なしとしない。ある社会がある種の構造をとっているとすれば、それが存続しうることをこの図式は説明できる。だが一歩踏み込んでこの社会が何故にそのような仕組みになっているかを知らうとすると、どうも判然とした答えが戻ってこない。諸家が批判するパーソンズの理論は社会体系の変動・変化を説明できないという点にも、この点がどこかで関連があるのであろうか。経済システムにしても政治システムにしてもそれぞれの社会でそれぞれ特定の制度をもち仕組みをもっている。

中世の封建社会では領主―農奴の関係を軸にする経済システムがあり、また恩顧と奉仕の系を軸にする王と諸侯の封建的な政治システムがある。領主は農民にたいして人身支配権や領主裁判権をもつ。ついでながら封建制度にも経済的な封建制度と政治的な封建制度との二通りのそれがあることに留意しなければならない。もちろん経済制度とし

ての封建制度だけが封建制度であるわけではない。これら二通りの封建制はペアになっていることが多く、互いに対応しあひまた支えあっているといつてよいと思われ<sup>(2)</sup>。マルクス流にいえば経済的な封建制こそが封建制の主体であり、政治的な封建制はその上部構造であつてその反映形態であると解される傾向が強い。経済的な封建制が主体で政治的な封建制は添柱とみなされることになるうか。ただ経済的な封建制の内容を調べてみると、身分的な人身支配權などのいわゆる経済外的強制とわがちがたく絡み合っていることが多い。純粹経済的な封建制というのはほとんどないといつてよい。政治的封建制があつてはじめて経済的な封建制があるといつて過言でない位である。前者が主体・「支配的」で後者が従であるのか、後者が主体で前者が従であるのか、あるいはそのいずれでもなく両者は同權的な立場でペアをなしているのか、この組み合わせは偶然の結果なのか、それとも必然なのか。なかなか難しい問題である。いずれにせよ経済制度として封建制があり政治制度として封建制がある。経済と政治がそのような制度をもち仕組をもつのは何故であるのか、経済制度としての特定性と政治制度としての特定性とのあいだに關係はないのか、あるとすればどのような構造的な關係があるのか等が問われなければならない。中世のヨーロッパで経済的な封建制が成立し存続し他の経済システム—例えばいわゆるアジア的生産様式あるいは資本主義—とならなかつたのにはそれなりの理由があろう。その理由は何か。さらには経済的な封建制に対して、たとえば議會制的な民主主義でなく政治的な封建制が成立し存続しているのは何故なのかが問われねばならないであらう。

ある社会の構造を真に理解しようとするれば経済システム、政治システム、社会的統合システムなどが何故にある型をとり他の型をとらないのかを究めねばならない。またある特定の経済システムとある特定の政治システムとが共存しました相互作用を行うのは何故であるかを究めねばならない。これらの諸点についての本格的な問いかけがなされな



ければ、表面的あるいは現象的な社会の構造は解明できるにしても、それらの構造の底に横たわるもの、いわば「構造の構造」とでもいうべきものは明らかにならない。それでは構造さえも本当に理解しえたことにならないというべきかもしれない。古典派経済学等の水準をこえてマルクスが『資本論』の執筆や史的唯物論の定立ではたそうとしたのは、このような内面構造の分析であったということもできるだろう。またこの次元での明確な理解力がはたされなければ、システム間の「相互作用」・「相互交換」の意義も本当には判からずじまいに終わる恐れもある。社会を構成する各種の要因・システムのあいだには、深層での複雑な相互連関がある。そのうえに立つてそれぞれのシステムのあり方が特定化される。その連関は史的唯物論の公式的なシェーマが示そうとするほどに、単純でないかもしれない。しかしこの内的連関の存在はおそらくは否定できない事実であろうから、その真相を解き明かす努力は必要であろう。そのさいにM系、M—N系、M—M系、M—M'系などの軸との関わりも十分に考慮さるべきであろう。

パーソンズの理論は社会の均衡を説くが、社会構造の変化・変動の理論が欠けているという批評は数多い。たしかにパーソンズは社会の存続を諸システム間の均衡を軸にしてとらえようとする傾向が強い。しかし変化・変動の論点に彼が関心をもたなかったというのは誤解であろう。いえることは社会の変動・変化の理論化において彼の努力が相対的には手薄にとどまったということではないか。のちにもう少し詳しく論じる機会があると思うが、パーソンズは社会変動・社会の発展を「機能分化」(differentiation)や「価値の普遍化」(value generalization)を軸にして理論化しようとしている。例えば次のように記している。

「著者は機能分化」(differentiation)も「モデルとしての社会体系の」構造的変化にかかわる四つの主なる過程の一つにすぎないと考えている。この四つの過程は、ともにあいかわりながら、より高度な体系のレベルへと「進ん

でゆく」進化を生みだしてゆくのである。(各社会体系に應用してみても、著者は他の三つの過程を、適応能力上の上昇 (adaptive upgrading)、『再統合 (reintegration)』、『包含 (inclusion)』、『価値の普遍化 (value generalization)』とよんでみようと<sup>(2)</sup>思う)。社会を構成する組織の分裂を示すとみられる「機能分化」にしても、生産力・経済力の上昇を示すとみられる「適応能力上の上昇」にしても、さらには行為者の自由裁量の余地を大きくすると説かれる「価値の普遍化」にしても、社会の発展にある程度平行してみられるといえよう。かりにこのことが認められるにしても、これら四つの過程が進むことを軸にして社会形態の変化が起こり発展が起こると解しうるであろうか。経済制度はたんに「適応能力の上昇」に応じて変化するのであるか。政治制度の変化は「機能分化」によって起こると解されるであろうか。あるいは規範・価値観・社会的通念の変化にしても「価値の普遍化」の過程にあって起こるとすることで事態を正しく認識しえたことになるのであろうか。かりにマルクスやエンゲルスがいう原始共产制、古典古代、封建制、資本主義の歴史的発展を念頭におくとして、その歴史的な変遷をこの四つの過程の結果として説明できるだろうか。やはり躊躇いを感じるというほかない。これらの時代の推転はどのように滑らかな社会変動 (social change) ではない。時代の変化のさいには社会を構成する要因・制度・システムのあり方に根本的な変化が起こり、経済、政治、社会、宗教などのシステムの対応関係、組み合わせにおいて根本的な変化が起こることがしばしばである。むしろ諸システム自体のあるいは社会の構造全体の、大変にドラスティックな地じり的な変化・組み替えが起こるのが普通である。もっともこのような全面的な社会構造の組み替えが起こるのも、永い年月をかけて進行する小刻みの連続的な変動の積み重ねによるばあいもあるだろう。それを認めるにしても、ある社会形態から他の社会形態への推転のすべてを連続的な変化に帰着させることは難しい。

パーソンズの社会理論は社会構造の把握においてがいて平面的に傾き、立体的な把握がもとめられるばあいにおいて十分な深さを欠くきらいがあるように感じられる。社会変動、社会的な進化の理論においては、社会構成の根本的な組み替えが何故起こるかの問いに正面から答えられる高みに達していないようにみえる。M・ウェーバーよりは精巧に体系化された社会理論の形成を行っている点に、パーソンズの業績が注目される所以がある。ところが社会の認識あるいは歴史の認識において垣間見られる深層の節理を洞察する点でパーソンズはウェーバーに一步ゆずっている感がある。その反面、ウェーバーは社会理論、歴史理論において比喩的にいえば、それぞれの地域の地形の研究に打ち込む反面、歴史・社会の全域にわたる地図の作成には十分な成功を収めていない。マルクスに比してはもちろんパーソンズにくらべてさえも。というよりはウェーバーはそのような目標を正面から追求しようとする考えを余りもっていないかったというべきかもしれない。

### 構造主義とマルクス主義

パーソンズの社会理論では、それぞれのシステムの内的な連関が深く追求されるかたちになっていない。AGIL図式にしてもそれぞれの社会的要因・システムが社会構成体の構造を決定するうえに及ぼす規定力が同格であるとは限らない。というよりはむしろ規定力には等級の違いがあるのが普通であろう。そのためにまた社会は必然的に立体的な構造をもつことになるのであろう。例えば資本主義社会では資本の利潤ないしは利子の追求運動や資本蓄積運動を核とする経済システムが、社会の全体的な編成にたいしましたその変動にたいして強い規制力を發揮している。これにくらべて現代では未開社会で強い規制力を發揮していた親族の規定力がいちじるしく後退している。(二)一つの従属

的な関係となる」『ドイツ・イデオロギー』封建社会についてみると、資本主義社会と同じように経済システムが強い自律性を示した社会の構造と運動を決定づけるうえで第一級の役割を演じるとはかぎらない。そこでは経済活動は政治的關係や社会的な規範・慣習などによって制約されつつ営まれるほかない。領主権力の規制・要求も絡んでくるし、農民の属する共同体の規制も絡んでくる。基軸産業である農業の直接的な担い手が農民であるにしても、彼等の経済合理的な判断によって農業経済が営まれる面は薄いといつてよからう。経済の動向が社会のまた政治的なシステムに対して持つ意味とそれが与える影響が大きいにしても、経済のあり方が社会全体のあり方あるいは社会の構造を第一義的に規定するとはいきれない面が残る。政治的な封建制度、農村共同体のような社会的な制度が社会の仕組みを決定するうえで規定的な役割を演じているともいえる。封建社会の構造をかたちづくるうえで経済システムや政治システムがどのような規定力を發揮したかは研究を要する興味ある課題であろう。ところで親族が社会の仕組みを規定づける力は資本主義社会ほどではないにせよすでにかなり後退しているとみなされる。社会形態が異なるのに応じた社会を構成する要因・システムがもつ規定力もいろいろに変化する。特定の社会がある仕組をもつばあいそれを決定づけるにあたり社会を構成する諸要因が演じる役割は、それぞれの社会形態について演劇の役回りにも似てそれぞれに異なるはずである。パーソンズの機能・構造主義の社会理論ではこの辺の事情がややもすれば見落されがちで、その理論によって見通しが良くなった所がある反面、それがためにかえって見えにくくなっている部分もある。生物の種々の臓器とは少し違い社会の諸要因は社会の存続にとって欠くことができない同格の要因であるとはいきれない。同格の要因のあいだの「相互交換」あるいは「相互作用」を理解しさえすれば社会の構造がはっきり判かるともいきれない。

アルチュセールは「過程というものが複合的であり、支配的要素をもつ構造をもつからこそ、こうした構造の生成と、この生成のあらゆる典型的な側面とを實際に説明することが可能なのである」と述べる。<sup>(3)</sup>あるいは「支配的要素をもつ構造をそなえている複合的過程の現実」とも述べている。「支配的な要素をもつ複合的な構造」という表現のなかには、社会の仕組みをめぐる透徹した眼が光っているように思われる。アルチュセールは、またその流れを汲むバリバールらのアルチュセーリアンもこのような視角を定立しえたことよって、とかく平面的に流されやすい構造主義の水準を超えることに成功している。<sup>(4)</sup>もちろん「複合的な構造」「重層的決定」という理論をとおしてアルチュセールが他面では歴史認識における「経済主義」(economism)を克服する苦闘に耐え、その試みにおいて注目すべき成果を挙げえたことも明らかである。もともとマルクス主義の歴史観たる史的唯物論は素朴な「経済主義」・「技術主義」にとどまりうるものではありえない。経済主義的に理解される史的唯物論は歴史的發展・進化の鉄のごとき必然性を証しうる理論として、また資本主義から社会主義への移行の不可避性を単なる予言でなく科学的な立言として証すると解されることによって、体制変革への熱情の盤石の支えともなりうる面があった。しかし実践のためにいかに有効で便利であるにしても、そのために冷徹な社会・歴史についての省察がおろそかにされ曲げられてよいものでもなからう。もちろんその水準に低迷するかぎりでは、史的唯物論はイデオロギー・信条ではあっても科学的な歴史観・世界観とはなりえない。史的唯物論の科学的な深化があるいは歴史観のさらなる進展がもとめられて久しい。そのような知的状況——第二次大戦後とりわけスターリン批判後の——のなかにあってアルチュセーリアンの営為は大きな意義をもつと解される。「支配的な要素」をもつ「複合的な過程」という規定には構造主義の地平を超える史眼の輝きが見とれるが、史的唯物論がどのように活かされるかという点に絡んでは「経済による最終次元での決定」が説

かれる。<sup>(5)</sup>「複合的な構造」「重層的な決定」を認めるにしても、他面で「経済による最終次元での決定」が認められることによって史的唯物論の有効性は保たれると考えられている。もちろんこのばあい政治、法律、宗教、イデオロギ―には「相対的自律性」があると解されており、それらのあり方が経済によって直接的に規定されるとは考えられていない。では「最終次元での決定」がなされるという命題はどのように明証されているのであろうか。社会の構造・歴史の法則性を検出すること、また史的唯物論の有効性を明らかにするという、現在われわれが取り組んでいるテーマにより一層明細な解答を作成するためには、アルチュセーリアンの思索、学問的営為のさらなる吟味をも含めて統稿での論議がなお必要になると考えられる。

(一九八四年六月)

- (1) パーソンスの業績は数多く多岐にわたる。さしあたり『社会的行為の構造』①②⑤稲上・厚東訳、『社会体系論』佐藤訳、『社会類型進化と比較』矢沢訳、『近代社会の体系』井門訳などをあげておく。パーソンスについては、田野崎昭夫編『パーソンスの社会学論』、佐藤勉『社会機能主義の研究』
- (2) A・ギデンズは支配 (domination) には「種がある」としている。(A. Giddens, A contemporary Critique of Historical Materialism その④は authorization とされ人間にたゞす支配力 (command over persons) ⑥は allocation とある) それ、その内容は command over objects or material phenomena とする。支配は、対人、対物の二通りがあることは留意すべきことであろう。T・パーソンス『近代社会の体系』井門訳四二頁。
- (3) L・アルチュセール『甦えるマルクス』Ⅱ一二七頁。
- (4) 代表例として、アルチュセール・バリバル『資本論を読む』
- (5) 『甦えるマルクス』Ⅱ、一四頁。構造主義とマルクス主義との間には欧米では永年にわたる知的緊張関係がつづいており、両者ともそこから強い知的刺激を受けていることは注目されてよい。次稿でさらに立ち入って論及したい。関係の文献としていくつかを挙げておこう。L・レヴィ・ストロース『人種と歴史』荒川訳、A・ジュンキンス『レヴィ・ストロース再考』矢島訳、A・ルフェーブル『構造主義をこえて』西川・中原訳、M・ゴドリエ『経済における合理性と非合理性』Cohen, Karl Marx's Theory of History—A Defence ブイヨン編『構造主義とは何か』アルチュセールについて、例をば今村仁司『歴史と認識』参照。